

かくしほちよじ

八千種小学校三年
木村 悠太

事です。子どもたちが、わらと竹で作られた「ほちよじ」を「かくす」ことから、こう呼ばれるそうです。

まず、「かくしほちよじ」の準備として、1月2日に当人と呼ばれる代表者9名が集まり、やぐらを組みます。「ほちよじ」は、当人が10月の終わりに「わら取り」、11月の終わりに「わら編み」をして作っていきます。作り方は、まとめたわらの束を3〜4つずつ編み込んでいき、一本の帯のようにします。それを三角形のやぐらにまいて「ほちよじ」の完成です。

ぼくは、福崎町の伝統行事である「かくしほちよじ」について調べました。「かくしほちよじ」を調べようと思ったきっかけは、お父さんが代表者である当人をしていて、「かくしほちよじ」という言葉をたくさん聞くようになったからです。はじめは「かくしほちよじ」というものがどういうものなのか分からなかったけれど、調べていくうちに、古くから大切に受け継がれている伝統行事であることが分かりました。

「かくしほちよじ」とは、1月の成人の日の前日から成人の日にかけて、鍛冶屋地区で行われていて、一般には「とんど焼き」と言われる小正月行

成人の日の前日、いよいよ儀式当日です。当日は、「引き継ぎ式」や

「無言の行」「きつね追い」などが行われます。「引き継ぎ式」は、成人の日の前の晩に、村中の男の人の前で行われます。今年の当人から、来年の当人へ、歴代の当人の名前を記した帳面を箸で渡します。「引き継ぎ式」が行われている間、子どもたちが村中のどこかに「ほちよじ」をかくします。当人たちは全く分からなないので、探すのがとても難しいそうです。これが「かくしほちよじ」と呼ばれるいわれです。

夜中に当人たちが「ほちよじ」を見つけると、昔からきめられた場所に「ほちよじ」を組みなおします。「ほちよじ」が組み終わった後、「無言の行」と「きつね追い」を行います。「無言の行」では、ぼくのお父さんがしていた親の親と呼ばれる人がひとり、とんどが行われる場所の近くでひと言もしゃべらず、だまつて赤飯と魚を一本箸で食べます。

儀式の翌日は、早朝5時半ごろからとんどを行います。当人は、火が消える午後9時から10時頃まで

火を見守ります。これが「かくしほちよじ」です。

ぼくは、「かくしほちよじ」を調べて、「かくしほちよじ」とは、昔から受け継がれている大切な行事であることを知りました。調べる前は、とんどで習字やお正月飾りを燃やすだけなのかと思っていたけれど、儀式のずっと前から、たくさんの準備があつて大変なのだということに驚きました。一つ一つに、「みんなが元気にすごせますように」「作物がたくさんとなりますように」という願いが込められていて、たくさんの人の思いがまつた行事なのだと感じました。ぼくたちは4年生から参加します。「ほちよじ」をかくすのが楽しみです。ぼくのお父さん、お兄ちゃんがそうであるように、来年からはぼくも「かくしほちよじ」の伝統を引き継いで守っていききたいと思います。



第四回福岡市柳田國男ふるさと賞 小学校高学年の部 受賞

ぼくの家の周りにある 施設や文化財調べ



福岡小学校五年
後藤 駿幸

ぼくは、夏休みにぼくの家の周りにある施設や文化財を調べました。動機は、家の近くでも、知らない所や行ったことのない所があったからです。また、家からの距離も調べたいと思いました。

最初は、家から五百メートルの弁天池です。

弁天池には、シルビアシジミという蝶が生息しています。日本一小さいと言われているシジミチョウ科の一種です。福岡市では、弁天池周辺のみで見られます。

弁天池から見える、中小企業大学

校は、家から一キロ二百メートルです。中小企業施策の柱として、人材の育成とその対応力の強化のための、関西初の中小企業大学校として、一九八〇年に建設されました。

中小企業大学校から、農道を通って行くと医王寺があります。医王寺は、家から五百メートルです。医王寺には、神谷古墳があります。神谷古墳は、町指定文化財です。神谷古墳は、一辺約二十メートルで二段階構築の方墳です。全長十一メートルの横穴式石室で、七世紀前半につくられたと考えられています。町内唯一の方墳です。

ぼくの家から三キロ七百五十メートルのところには、應聖寺があります。このお寺は天台宗で沙羅の花が咲く寺として有名で、関西花の寺二十ヶ所の一つで、県指定文化財です。田口に、金剛城寺があります。ぼ

くの家から三キロ八百五十メートルです。このお寺は真言宗の名高いお寺であり新四国三十番の札所です。このお寺は、町指定文化財です。金剛城寺から七種山へ行く途中に青少年野外センターがあります。健全な青少年の育成を目的とした山小屋テントサイト等を整えた町のキャンプ場です。家から五キロ百五十メートルです。

七種山を歩いていくと、七種の滝があります。七種の滝は、落差七十二メートル、幅三メートル、県下八景、県観光百選、近畿観光百景に選ばれています。福岡にはもう一つ大

学があります。それは、神戸医療福祉大学です。家から二キロ五十メートルの所にあり、二〇〇〇年に設置された私立大学です。学部は、社会福祉学部です。最後に、ぼくが二年后に通う福岡西中学校です。平成二十八年

の生徒数は二百三十五人で、家から六百五十メートルのところにあります。

「調べて分かった事と感想」

ぼくの家近くに、こんな施設や文化財がたくさんあったことにびっくりしました。おじいちゃんやお母さんと福岡のことを調べて楽しかったです。ほかにも福岡の施設や文化財はあると思うので調べてみたいと思います。



神谷古墳

田原と八千種地域の道しるべ


 福崎東中学校一年
中井 陸登

僕は、ふるさと学習として田原と八千種にある道しるべについて調べました。なぜこのテーマにしたかという点、ふだん何気なく生活している自分の家のまわりに「道しるべ」がたくさんあることに気づき、調べてみようと思ったからです。

調査方法は、神崎郡歴史民俗資料館で買った「福崎の道く辻の出会いと道しるべ」という本をもとに、「道しるべ」をひとつひとつ探し、まとめました。

実際に僕が探した「道しるべ」は、田原で十一基、八千種で六基でした。これだけを見ると、八千種の方が数が少ないように感じるかも知れませんが、でも実際には僕が探しきれなかっただけで、他にもたくさんあるそうです。それでは、実際に僕が探した「道

しるべ」を紹介します。まず田原では、

- ①北野地藏堂、②北野西の池東、③辻川交差点、④亀坪地藏堂の前、⑤田尻金垣内池、⑥西野の野、⑦西光寺姫ヶ池、その他に亀坪・大門の路傍にそれぞれ一つ、田尻の路傍に二つありました。次に八千種では、
- ①長池の傍ら、②余田新田、③東大貫日光寺入り口、その他小倉・余田・庄の路傍にそれぞれ一つずつありました。

次に「道しるべ」の特徴について説明します。まず一つ目は、石柱に行き先や方向が刻まれています。行き先はお寺を示すものが多いと思えました。二つ目は、「右 ○○」「左 ○○」というように方向が刻まれていました。三つ目は、「道しるべ」は地藏の形が刻まれているものが多く、村の人に大切にまつられていることもわかりました。四つ目は、「道しるべ」が道の拡張工事などで、元の場所から移されているものがあることや石が風化して見にくくなっているものがあるということもわかりました。

特に風化しているものについてはしっかりと保存し、後の世に伝えていくことも大切だと思いました。

次に「道しるべ」からわかることについて書きたいと思います。南北の道にある「道しるべ」は、但馬道が通っていたので、「ひめし」「たしま」と刻まれているものが多く、明治時代には整備され、「銀の馬車道」として使われていました。東西の道にある「道しるべ」は、北条街道が通っていたので「ほうじょう」「北条道」と刻まれているものが多かったです。「ほつけ」「法花」と刻まれているものは、加西市法華山一乗寺へお参りする法華道への「道しるべ」であるということがわかりました。

次に「道しるべ」が案内している場所について書きます。「妙徳山」「もん志ゆ」と刻まれているものは、加治谷にある妙徳山神積寺への「道しるべ」です。「日かふ寺」「日光寺」と刻まれているものは、大貫にある日光寺山日光寺への「道しるべ」です。「ほつけ」「法花」と刻まれているものは加西市の法華山一乗寺への「道しるべ」です。

最後にまとめと感想です。実際に「道しるべ」を探

してみても、自分が思っていた以上にいっぱいあったのに驚きました。また、姫路を「ひめし」と言ったり、日光寺を「日かふ寺」などと表現することや昔の街道の名前を知ることができ、本当にためになりました。

また、今はカーナビゲーションなどもあり、目的地に着くのは簡単ですが、昔の人は、「道しるべ」だけで着くというのがとてもすごいと思いました。それから「道しるべ」を苦労しながら探していたら、一緒に探してくれる親切な方がいて本当に助かりました。福崎町には優しい人がいっぱいいるということがよくわかりました。また、「道しるべ」は、南田原に少なく、八千種にたくさんあると本でわかっていましたが、見つけ出せませんでした。できたらこれから、八千種方面の「道しるべ」を時間をかけて調査し、来年の発表につなげていければと思います。



北野 地藏堂



田尻 地藏堂

第四回福崎町柳田國男ふるさと賞 中学校の部 受賞

巡礼道 三枝草峠から百町峠まで 板坂の果たした役割



福崎西中学校三年
山口 華 永

はじめに

私は、中学一年生の「ふるさと学習」で、私の住む板坂から夢前町に抜ける峠道を歩いてレポートにまとめました。今はほとんど人の通らない峠道ですが、実際に歩いてみると、お地藏さんや道標があり、かつては重要な道であったことを感じました。また、この峠道は「巡礼道」の一部で、茶屋や宿屋もあったことも知りました。しかし、当時はまだ一年生で、「巡礼」の意味も十分理解できておらず、峠道を紹介しただけのレポートに終わってしまいました。

そこで、中学三年生になって改めてこの「巡礼道」について詳しく調べてみようと思ったのです。

一 巡礼、巡礼道とは

巡礼とは、「信仰を確認しより深めようと霊場を旅する」ことをいいます。日本の巡礼は、一定の地域にある霊場をめぐるのが主で、「西国霊場」の三十三ヶ所や、「四国霊場」の八十八ヶ所が有名です。

西国霊場は観音菩薩を祀っています。観音菩薩は私たちになじみの深い仏様で、三十三の姿に変え、私たちが苦難から救って下さると信じられています。三十三ヶ所巡りというのは、ここに由来があります。

巡礼道とはこの霊場と霊場を結ぶ道のことで、板坂の巡礼道は、二十七番札所の書写山円教寺を巡礼した人たちが、二十八番札所である丹波の成相寺に向かうために利用したものです。霊場は、一般には「札所」と呼ばれています。

では、「西国霊場」は、どのようにしてはじまったのでしょうか。

もともとは、養老二年（七一八）、長谷寺の徳道上人が、悩み苦しむ人々を救うために三十三の霊場を設け、

『三十三ヶ所をめぐる」と救われる』と説いたそうです。しかし、当時はあまり広まらず途絶えていました。

再びこの霊場が注目されたのは、その二七〇年後、花山天皇が自ら霊場を巡ったことがきっかけとなり、巡礼がさかんになりました。世間でもよく知られているご詠歌は、この時に花山天皇が詠まれた歌だそうです。

江戸時代になると、巡礼は庶民の間でも盛んになりました。戦乱の間でも治まり、庶民の生活にも少し余裕が出てきたのでしょうか。江戸時代の巡礼者の多くは農民で、五穀豊穡や無病息災などを願い、村を代表して一生に一度だけ一年間かけて西国巡礼の旅に出ることができたそうです。このように、地域の代表として参拝することを「代参」といい、お札などをもらって帰ってきたそうです。

二 板坂に残る巡礼道の名残

巡礼道の名残を調べるために、夢前町前之庄から市川町奥まで歩いてみました。

まず行ったのは、三枝草（さえずさ）峠です。峠には、お地藏さんがあり、この辺りに茶屋ができるほどにぎわっていたそうです。また、前之庄側の入り口には、道標があり、そこには、「ひたりなりあい」という文字が刻まれていました。

次は板坂地区内の道を調べました。田んぼの脇道から、応聖寺の下まで全長二〇〇m、幅二mたらずの細い道があります。その道沿いに灯籠があることから、巡礼道であることが分かります。巡礼道は、私たちが主に使っている道ではなく、細い路地になっていました。

田口方面に曲がるところにも、道標があり、「ひたり」という文字が



板坂内の巡礼道



板坂内の灯籠



百町峠入口の灯籠



百町峠入口の道標

見えます。ここで左折せずにまっすぐ行ってしまふ人が多かったため、道標が設けられたのかもしれない。そして、松尾橋を渡り、田口に入ります。

田口を抜けると百町（ひやくまち）峠の入口があり、ここにも、二つの道標と二つの灯籠が立っています。道標の一つには、「右丹後成相山 左前之庄実粟」と、もう一つには、「書写より四里 成相まで二十三里」と彫つてあります。一里は約四kmですから、書写山からこの地点まで十六km、成相まで九十二kmキ口あるということです。ほぼ正確な距離が記されていることにも驚きます。灯笼も巡礼者が道に迷わないように作られたのかもしれませんが。

ここを過ぎると、市川町奥へぬける百町峠へつながります。この道も民家の前を通る細い道で、車一台がぎりぎり通れるくらいです。また、道中には、お地藏さんやお稲荷さんもありました。

こうして、歩いてみると夢前町の前之庄から市川町の奥まで、いたるところに巡礼道の名残がみられます。要所には道に迷わないように、きちんと道標がありますし、旅の安全を祈るためにお地藏さんも祀つてあります。現在の道と比べると狭く感じ

られますが、当時は自動車もない時代です。人が行き交うには十分な道幅だったと思われるます。

三 板坂の果たした役割

この巡礼道において、板坂はどのような役割を果たしていたのでしょうか。二十六番札所の法華山一乗寺から書写山円教寺までが約二十五km。円教寺から板坂までが約十六km。合わせて約四十一kmになります。一日の行程を終えるところに、ちょうど板坂あたりに到着したのではないのでしょうか。そのため、板坂は「巡礼者の宿泊地」としての役割を果たしていたと考えられます。明治末から大正時代にも、巡礼者を宿泊させる家が八戸ばかりあったそうです。

しかし、調べていくと、どうやら単なる宿泊場所ではなかったことが分かってきました。

宿泊場所を提供した家々は、「巡礼者に協力したい」という一心で、宿代をとらなかつたというのです。ただ、宿泊させてもらった人も、巡礼の中で手に入れたお札などを家の人に披露するなど、御利益をお裾分けすることで、その礼に答えていたようです。

庄屋の家の近くにあった地藏堂にも宿泊を許していたといえます

から、板坂の人たちが営利を目的にしなかつたことがわかります。さらに、次のような話も残っています。

三河から孫を二人連れたお年寄りの夫婦が板坂に一泊したが、その夜、夫婦の容体が急に悪くなった。村の人々が必死で介抱をしたが、夫婦は亡くなってしまい、孫二人だけ残された。身の上を案じた村の人々は、この二人が安全に三河に戻れるように先々の村に取り計らい、無事に送り届けた。

というのです。幼い子どもたちのために板坂の人たちが必死になつている様子がうかがえます。

下の写真は、私の家の近くにあるお墓です。いつもきれいにしており、お花も供えてあります。当時は、疫病などもあったことでしょう。板坂で行き倒れた人を葬つてあると聞いています。丁寧に葬り、その霊を慰めてあげていたことがわかります。

このようなことから、板坂は巡礼者が宿泊する場所を提供するだけの村ではなく、巡礼者を癒し、もてなし、いざという時には必死になつて守り支えるという大きな役割を果たして

いたと考えられます。巡礼者にとつてなくてはならない村だったのです。

おわりに

巡礼道について改めて調べることで、当時の板坂の人々の信仰心や人情の厚さを知ることができました。今でも静かに花が供えてあるなど、そのやさしさや人を思う気持ちは、時代を超えて現在に受け継がれていることに感動をおぼえました。そして、長年に渡り、板坂が多くの人たちを支えてきたことに、そこに住む者として誇りを感じました。

今度調べる機会があれば、板坂を出た巡礼者が成相寺にたどり着くまでの行程を調べたり、他の宿泊地になつていた地域と板坂とを比較してみたいと思います。



巡礼者のお墓

福崎町制六〇周年記念 特別価格で販売中!



- 第一巻 五,〇〇〇円を
三,〇〇〇円
- 第二巻 四,七〇〇円を
二,八二〇円
- 第三巻 四,〇〇〇円を
二,四〇〇円
- 第四巻 四,五〇〇円を
二,七〇〇円



送料一冊四七〇円
※二冊以上の場合、
送料が変わります。
※平成三十年三月三十一日までの特別価格です。

お問い合わせ先
福崎町立神崎郡歴史民俗資料館
☎〇七九〇一二二一五六九九
〒六七九一三二〇四
兵庫県神崎郡福崎町西田原
一〇三八一一二



福崎町史執筆の一覧

- 〇監修 石田善人 岡山大学名誉教授
神戸女子大学教授
- 〇町史編集専門委員
- 地質・地理 田中 眞吾 神戸大学教授
考 古 松本 正信 姫路高等学校教諭
古代・中世 中野 栄夫 法政大学教授
近 世 今井 修平 神戸女子大学教授
近 世 竹下喜久男 佛教大学教授
近・現代 今西 一 小樽商科大学教授
近・現代 須崎 愼一 神戸大学教授
民 俗 千葉 徳爾 千葉県立中央博物館
客員研究員

- 〇特別執筆者
- 地質・地理 後藤 博弥 神戸女子大学教授
地質・地理 神吉 和夫 神戸大学助手
金石文 藤原 昭三 町史編集室長
絵 馬 金澤 勝 香寺町文化財審議委員

※平成七年三月当時の役職を記載しています。

福崎町史ハ全四巻Vのあらまし

第一巻ハ本文編I V

- 第三回配本
平成五年度
- 自然編 考古編
- 第一章 福崎とその周辺の自然
福崎の自然の成立/福崎とその周辺の起伏の形成/新しい時代の福崎の自然を支配している原理・原則/最終水期の神崎郡/福崎盆地における段丘形成
- 第二章 考古学からみた福崎
寒冷な気候と狩りの時代/温暖な気候と森の暮らし/コメつくりと戦いの時代/前方後円墳の時代と神崎郡
- 古代編 中世編
- 第一章 古代の播磨
律令制社会の成立と播磨国/律令制社会と播磨国/王朝国家の成立と播磨国/王朝国家期の政治制度と播磨国/荘園制社会の成立と播磨国/院政・平氏政権の成立と播磨国
- 第二章 中世前期の福崎
鎌倉幕府の成立とその展開/守護・地頭の設置と播磨の守護・地頭/幕府政治の展開と御家人制/中世社会の構造と播磨/鎌倉時代の福崎周辺/両統分裂と幕府の滅亡
- 第三章 中世後期の福崎
建武政権および室町幕府の成立と南北朝内乱/幕府政治の展開とその構造/福崎周辺の社会の動き/足利乱と赤松氏/戦国時代の福崎/戦国の動乱/古代・中世の福崎の文化
- 民俗編
- 第一章 福崎地域の民俗事象と全国的位置づけ
柳田(松岡)國男の記憶に残る明治前期の福崎の民俗/福崎地方における民間習俗の変遷/福崎地方住民の生活の場とその手段/地域社会の諸相とその構造/土地の名、人の名、家の名、その意義/季節の祭り/身のうへの祝い/信仰とその表現/神社・寺堂・俗信/これからの課題/未解決の資料(三)

第二巻ハ本文編II V

- 第四回配本
平成六年度
- 近世編
- 第一章 近世の福崎
近世社会の成立/近世社会の発展
- 第二章 近世福崎の文化
三木家好学の風/三木家の生活文化/辻川周辺の学芸
- 近代編 現代編
- 第一章 明治期の福崎
明治維新と福崎/播但一揆/文明開化と福崎/日清・日露戦争前後
- 第二章 大正期の福崎
地域産業の発展/小作争議と水
- 第三章 昭和前期の福崎
昭和大正と教育の台頭
- 第四章 福崎地域の戦後史
満州事変/日中全面戦争と福崎地域/敗戦への道
- 敗戦と復興への道/新福崎町の誕生/高度成長期の福崎地域



三木家住宅

第三巻ハ資料編I V

- 第一回配本
平成二年度
- 地質・地理編 考古・金石文編
- 第一章 福崎とその周辺に関する資料
福崎の地形・地質とその説明/福崎の表層地質/明治中期の市川実測図
- 第二章 福崎の原形・古代・中世資料
神崎郡における旧石器時代研究の概況/神崎郡における縄文時代研究の概況/旧神崎郡における弥生時代研究の概況/旧神崎郡内における古墳時代研究の概況/旧神崎郡内の奈良時代以降の研究の概況/福崎における中世金石文資料
- 古代編 近世編
- 第一章 福崎をめぐる古代史料
古代福崎(推古期/平安時代)/古代別編(編纂物)
- 第二章 福崎をめぐる中世史料
播磨国関係史料/田原庄関係史料/藤山庄関係史料/高岡庄関係史料/西岡庄関係史料/福崎町内伝来史料/中世別編(舟家歴史記録)
- 第三章 福崎の近世史料
領主支配と貢租/郷帳と国絵図/村明細帳/山境・入会争論/用水の争奪/山野の開墾/市川舟運と高瀬船/街道交通と諸負担/諸願書・証文・定書/因習と一揆・騒動/寺社と祭礼
- [付図] I 福崎町地形・地質図 II 明治中期の市川実測図



七種の滝

第四巻ハ資料編II V

- 第二回配本
平成三年度
- 近世編(続)
- 第一章 近世福崎地方の文化
文芸/教育/交流
- 第二章 姫路藩山崎組大庄屋日記
文久二年/文久三年/文久三年/慶応元年/慶応三年/明治四年/明治五年
- 近代編 現代編
- 第三章 明治・大正の福崎
播但一揆/政治/農業・商工業/交通・通信/生活/教育・文化/宗教
- 第四章 昭和前期の福崎
大正から昭和へ/昭和初期の福崎地域/満州事変とその影響/ゆれる福崎地域/日中全面戦争と福崎地域/破局への道の中で
- 第五章 福崎地域の戦後史
敗戦と戦後民主主義/新福崎町の誕生/経済・社会の変貌と福崎町/新たな時代にむけて
- 民俗編
- 第六章 住民生活の資料にみる福崎
記録に残る福崎の民俗資料/生活用具と景観
- 第七章 各地に残る松岡家の資料
- 第八章 福崎町の絵馬
- [付図] I 田原村西田原小字絵図 II 解説図 III 神東・神西郡地図 IV 同福崎町部分



松岡映丘画稿「浦の島子」
柳田國男・松岡家記念館蔵

第三十五回 福崎町美術展作品募集

第三十五回福崎町美術展（公募展）の作品を募集します。

皆様方のご応募を心よりお待ちしております。

◆会期

平成二十九年
五月十九日（金）～
五月二十一日（日）

◆会場

福崎町エルデホール

◆主催

福崎町・福崎町教育委員会

◆部門

日本画・洋画・書・写真・彫塑工芸

◆作品搬入

平成二十九年五月十三日（土）
午前九時～午後四時

◆審査員

日本画 安惠 隆司
洋画 志智 正
書 岡本 正志
写真 山岡 成男
彫塑・工芸 大上 巧

山桃忌奉賛 第三十二回短歌祭作品募集

柳田國男先生と井上通泰先生の命日にちなみ、両先生を偲ぶ会として、毎年八月に柳田國男・松岡家記念館により山桃忌が行われています。

短歌祭は文化協会と福崎短歌会により、山桃忌の当日に行っています。

本年の短歌祭は、左記の要領で作品を募集します。

記

日時 平成二十九年八月五日（土）

場所 福崎町文化センター

主催 福崎町文化協会・福崎短歌会

作品 未発表のもの・一人二首以内

応募料 一首につき五百円

要領 原稿用紙に楷書で縦書き

宛先 福崎町文化センター内

宛先 文化協会事務局 宛

締切 平成二十九年六月三十日（金）

賞 通泰賞・町長賞・議長賞・

教育長賞・文化協会会長賞・

商工会長賞・JA兵庫西賞・

神戸新聞社賞の各賞と佳作多数

選者 楠田 立身 先生

（兵庫県歌人クラブ顧問）

表紙の写真

主屋の保存修理を 終えた三木家住宅



保存修理前の三木家住宅 写真・桑原英文

三木家の屋敷地は一八六一・二八m（約五六三坪）で、敷地内には主屋（表座敷）、副屋、離れ、内蔵、米蔵、酒蔵（酒造蔵）、角倉、厩、表門が現存し、周囲は土塀で囲まれています。これら九棟の建物すべてが、昭和四十七年に兵庫県重要有形文化財に指定されました。

主屋の建築年代は明らかではありませんでしたが、平成二十二年度から実施した保存修理工事に伴う

文化財調査で、二階壁板から墨書が発見され、宝永二年（一七〇五）に建てられたことが判明しました。部屋は、表四間、裏四間の八室に分かれ、一部二階を設けています。建築当初は表西側の二室はなく、元文二年（一七三七）に増築されました。

副室、離れは安永二年（一七七三）の増築で、離れは面皮柱を用い、数寄屋風を多分に加味しています。

三木家住宅は建築当時の姿をよく残した大庄屋遺構として、建築学的に貴重であると同時に、近代においては、民俗学者・柳田國男、銀の馬車道（生野鉦山寮馬車道）との関わりも深く、地域を代表する文化遺産です。

編集後記

たくさんの方々のご協力により、福崎町文化第三十三号を発刊することができました。

玉稿をお願いしました皆様方には大変お忙しい中執筆いただき、ご協力くださいましたこと厚く御礼申し上げます。

ありがとうございます。